応用倫理研究教育と政治

山　内　廣　隆（広島大学大学院文学研究科・教授）

はじめに

本日はまず、北海道大学の「応用倫理研究教育プログラム」が、「応用倫理研究教育」について考える機会と発表の場を与えてくださったことに感謝したいと思います。「応用倫理研究」について言えば、私の場合ほぼドイツの実践的自然哲学研究と重なっております。それはハンス・ヨナスに始まり、ドイツのマイヤー・アービッヒやルートヴィヒ・ジープなどに受け継がれていった系譜です。従って、「応用倫理研究」は私にとって比較的自明なものであるのですが、「応用倫理教育」となるとそうはいきません。私はこれまで「応用倫理教育」について、反省的にあるいは体系的に考えたことはありませんでした。我々の「応用倫理学プロジェクト研究センター」も、期間限定ですが一応研究機関であり、教育機関ではありません。とはいえ、本日のシンポジウムが「応用倫理教育」のより深い考察のきっかけになれば幸いです。従いまして、本日はまず1.で応用倫理教育についての我々の現状を中心に報告します。次に、2.で応用倫理研究に移り、ここでは応用倫理研究への一つの提案を行うつもりです。

1. 応用倫理教育について

私はなんらかの応用倫理教育理論をもっているわけではありません。従って、自分自身を反省しながら、応用倫理教育について考えていこうと思います。私が「応用倫理教育」と聞いて最初に考えたことは、どういう人が教育対象になるかによってずいぶん違ったものになるだろうということでした。つまり、それを教養で行うのか、学部の専門として行うのか、それは文学部でなのか医学部でなのか、さらには大学院で行うのかでずいぶん変わってくるだろうと考えました。しかし、それと同時にプログラム化は不可能なのではないかと感じました。つまり、教養ではここまで、学部ではここまで、大学院の博士課程前期ではここまでというような仕方で、段階的発展的に教育を行うことは不可能ではないにしても、応用倫理教育には極めて難しいのではないでしょうか。なぜなら、応用倫理も哲学であり、当然そのなかに根拠についての問い、さらには原理の検証の問題なども抱えており、よって常に全体的思考を必要としているからです。（因みに、そうであるにもかかわらず、広島大学では来年度から全学一斉にリニアーなプログラム制を導入することになりました。）

ここにはリニアー（直線的）な教育こそ、最大の教育効果をもたらす教育であるという前提があります。日本の学校教育も当然このような前提のもとに行われています。とりわけ、統一化された指定教科書を使用する中等教育までは、まったくそうであると言っていいでしょう。加藤尚武氏によると、このようなリニアーなシステムにおいては「具体から抽象へ、既知から未知へ、感覚から知性へ、小さな全体から大きな全体へ、実物から言葉へ、特殊から一般へ段階的に進行するのが良い授業である」（『教育の倫理学』丸善、2006年、98頁）ということになります。もちろん、このような考え方の前提には、人間の「知性は本来的に具体から抽象へ、感覚から知性へと進行する」とい

うリニアーな知性観があるわけです。ヘーゲルの『精神現象学』は最も貧しい感覚的確信が徐々に高まり絶対知に至る道程でありますから、一見上のような経過を辿っているように見えます。ヘーゲルの"Bildung"(教養形成)とは、まさしくこのようなものだと言えなくもないのです。しかし、果たしてそうでしょうか。ヘーゲルの教養形成は一直線的な発展でしょうか。ヘーゲルは『精神現象学』の「緒論」で、そのような経験はいかにして可能かを問い、答えの輪郭を描いています。それはハイデガーが『ヘーゲルの経験概念』として論じた部分でありますが、哲学はいつでもそのように「根拠」への、そして「根拠」からの問いを携えているのです。したがってヘーゲルの場合、意識の発展は根拠へと還る旅でもあるのです。つまり、それは決して一直線的発展ではないのです。しかし、リニアーな教育体系にはそのような観点は欠落していると言わざるをえません。したがって、リニアーな教育体制が中等教育だけでなく高等教育まで拡がり、しかも自然科学だけでなく人文科学の領域へも拡大するということは大きな問題を抱えていると思われます。私は応用倫理学といえども哲学であると考えますし、そのように規定していいと思います。そうである以上、応用倫理学は単に応用の問題だけでなく、哲学的な基礎付けの働きも包括しているのです。したがって、応用倫理教育もこの点に留意しなければならないと思います。

さて、しかしながら北大のホームページで「応用倫理研究教育プログラム」の目的を見て、このプログラムが大学院教育を目的にしていることがわかりました。すなわち、そこには「本プログラムは学内の他研究科・学院との密接な連携のもとに、応用倫理各分野(中略)の研究者と専門的な実務家を養成することを目的としている」とあります。ここに言う「専門的な実務家」とは、私たちが「高度職業人」と呼んでいる博士課程前期で終了する人達であると思われます。しかし、博士課程前期で終了する人達が、現在の教育システムのなかで専門的な実務家になる力量をもちうるのかどうか、またたとえもちうるとしてもそれに相当する職業分野が社会に存在するのかどうか、問題山積のように思えます。

ところで、大学院における応用倫理教育で最も重要なことは研究者の養成であります。研究者の養成については、プログラムの目的のなかに「①本プログラムでは、従来本専攻で行ってきた文献研究や理論的研究を土台としながら、②専攻や研究科の枠を超えた研究組織との相互協力により、分野横断的な知識や技能を習得した人材の育成をはかる」と、あります。②は必ずしも応用倫理教育ではありませんが、少し拡大して広い意味での応用倫理教育として捉えるなら、①と②を同時並行的に教育することがいかに難しいかは、よく知られていることです。私は広島大学に赴任して十数年経ちますが、これまで大学院で応用倫理に関する授業を行ったことはありません。これまでの演習(学部を含む)で扱ってきたテキストは次の通りです。すべてドイツ語原典を丹念に読んできました。(どのテキストもすべて読みきったわけではありません。)

カント　『道徳形而上学の基礎づけ』
フィヒテ　『全知識学の基礎』他小品二つ
シェリング　『自然哲学の理念』、『我が哲学体系の叙述』
ヘーゲル　『差異論文』、『精神現象学』、『法の哲学』

①の文献研究や理論的研究の基礎はテキストをしっかり読めるということですが、これを習得するだけでも並大抵ではないのに、それと同程度に若いときから応用倫理研究を行うことは極めて難しいのではないかと思います。また、私の講座の前々任者は隈元忠敬氏でフィヒテ研究の大家ですし、その前任者は三渡幸雄氏でこれまたカント研究の泰斗です。また、両氏を引き継いだ高柳央雄氏も

そのスタイルを変えませんでした。そういう講座では従来の研究スタイルを崩すことはなかなかできません。また、崩してはいけないと考えています。

しかしそうであるからと言って、②およびそれに連なる応用倫理教育はやらなくていいということにはなりません。私は学部の哲学研究という講義で年に一回程度(前期か後期)応用倫理学(私の場合、環境哲学が中心です)の授業を行い、この講義には大学院生も必ず出席させています。もちろん、哲学史の授業などでも頻繁に応用倫理学に触れるようにしています。それから我々のプロジェクトセンターの例会には、大学院生の出席を義務付けています。このような教育を通して、応用倫理学への親しみとそれに関する基本的知識を習得させ、従来の研究スタイルで課程博士号を取得したら、応用倫理研究を全面展開させるということを考えています。一昨年フィヒテ哲学研究で学位を取得した院生が、昨年初めて情報倫理で論文を書きました。決していい出来栄えではありませんが、これが私の構想の一応の具体化ではあります。しかし、これでは応用倫理学研究は個人の資質に委ねられ、応用倫理学の専門家が育ちにくいというきらいがあります。私は西洋近世哲学講座に所属していますが、倫理学講座の越智貢教授や松井富美男教授(広島大学応用倫理学プロジェクト研究センターは西洋近世哲学と二講座ある倫理学講座から形成されています)は学部段階から、もう少し積極的に応用倫理教育を行っています。以上が、我々の応用倫理教育の現状です。

ここでは応用倫理教育の必要性には触れませんでした。なぜなら、現代の先端的な問題に哲学的倫理学的にアプローチする応用倫理学を教育することは、哲学・倫理学の分野では当然のことであるからです。

2. 応用倫理研究について

応用倫理学の日本導入初期においては、応用倫理学はなんらかの原理、原則を現実の問題に応用する学問にすぎないのではなく、これまでの哲学や倫理学では太刀打ちできなくなった現代の新しい深刻な問題に、積極的に関わっていく学問であるとされました。(我々のプロジェクト研究センター機関紙『ぷらくしす』に掲げられているセンターの目的も、こうした理解の下に書かれています。)日本では前者の意味が薄められ、後者の意味が積極的に喧伝されました。しかしながら、ドイツでは、応用倫理学は何らかの原理、例えばカントの道徳原理や快苦という功利的原理の現実への応用であると理解されています。ただし、ジープ達ドイツの実践的自然哲学派は、自分達の立場を応用倫理学に所属していると認めながらも、それとの区別も明確にしています。すなわち、実践的自然哲学は原理の応用だけを問題にするのではなく、原理そのものの妥当性への問いや、原理の新たな構築を視野に入れています。それどころかそこには応用倫理学の権利問題に関する問いも含まれています。さきほど、応用倫理学は哲学であると規定しました。ドイツの実践的自然哲学はまさしく上のような基本的問いを携えて現実の諸問題に関わっていきますから、実践的自然哲学は応用倫理学を内包する現代的哲学であると、私は考えています。但し、こうした問題については現在研究中ですのでここまでにして、本日の発表のなかでメインとなる提案を行いたいと思います。

さて、私が本日提案したいのは、応用倫理学研究と政治および政治哲学との結合です。応用倫理学は現代の先端的問題に倫理学的に関わり、これらの問題を解決するための実践の仕方を提案します。つまり、応用倫理学は現代の諸問題のソリューションと深く関わっているのです。決して、研究だけで事足りる学問領域ではありません。すなわち、応用倫理学は政治と結合し、その研究成果を政治過程に乗せ、現実化するところまでを視野に入れておかなければならないのではないでしょ

うか。さいわい、ドイツの実践的自然哲学派はそのような視野をもっております。

昨年私はマイヤー・アービッヒの『自然との和解への道、上下』(みすず書房)の翻訳を完成させましたが、その副題は「環境政策Umweltpolitikのための実践的自然哲学」です。彼はその冒頭で「本書の目標は自然との和解*への政治を全体的に構想し、かつ理性的に基礎づけることである」(上掲書、上26頁)と宣言しています。こうした構想を実現するためには、プラトン以来哲学がもっていた政治との密接な関係を復活させることが必要になります。アービッヒは、プラトンの全著作がめざしたのは、精神的にソフィスト達によって荒廃し、それによってペロポネス戦争に敗れたアテナイにもう一度「精神的支柱」を取り戻すことであったと解釈しています。残念ながら、プラトンはソクラテスの死後、アカデモスの森に引きこもってしまいますが、我々はそのように現実の政治から身を引くのではなく、いまこそ「自然との和解への政治」に乗り出していかなければならないのです。

周知のように、哲学や倫理学にとっては、いつでも「真理」が問題でした。アービッヒがそのようなものとして提起するのが「自然との和解」です。従って、これを規範として生きることが善き生きかたになるわけですが、哲学が政治に関わるということは、このような生き方を他者にも要求するということになります。真理を問う哲学者が政治に関わることは、古来より失敗の代名詞でした。また、私たちは最近でもそのような失敗をスターリニズム国家に見ることができます。しかし、アービッヒによれば、哲学が政治に関わるか、政治が哲学に関わるかすべきなのです。但し、その際に現在、哲学が担う役割として彼が提唱しているのは、めざましく発展している個別科学の成果を、自然との和解への政治へと統合する働きです。(これが具体的にはどういうことであるかは、後で少し触れます。)

「自然との和解」は、現実の生活様式の変更を要求します。すなわち、「毎日半ポンドの肉を食べ、多くの電気を消費することがよい生活であり、そのために働くことは価値があると考える」(上掲書、上10頁)近現代の生活構想の変更を要求します。この要求は、近代政治哲学の理念の否定と結びついています。マキャベリやホッブズに始まる近代政治哲学は、政治を正義の実現と考えるプラトンの政治哲学の否定から始まります。その転換点において、政治のめざすものは正義の実現から、欲望の充足へと取って代わるのです。近代政治哲学がめざした欲望の充足が等しく実現されている国家を、アレキサンドル・コジェーブは「普遍的同質国家」と呼びました。フランシス・フクヤマは、近代政治哲学がめざした理念すなわち普遍的同質国家は、二十世紀に西側先進工業国で実現されたと宣言しました。しかしながら、この理念を実現することが、地球環境破壊であったわけです。これが近代政治哲学の理念の帰結なのです。したがって、私たちは近代政治哲学の理念はもはや維持されえないと言わなければなりません。つまり、アービッヒにおいては、これまでのような自然の支配ではなく、「自然との和解」という規範に基づいて、その理念は新たに構想されなければならなかったのです。

ところで、アービッヒの「自然との和解」構想は、1982/83年の西ドイツ連邦議会選挙に際して、ドイツ社会民主党の政策綱領の中心に措かれることになります。1983年1月のドルトムントでの党大会で、彼の「自然との和解」構想に基づく政策綱領が満場一致で採用されたのです。もちろん、ここに至るまでは多大な努力を必要としたのですが、この一年後に彼はハンブルク市の環境大臣に就任し、ハンブルク市の環境政策を推進していきます。そこにおいて彼が政治の目標としているのは、「自然とのかかわりに関する公共性を政治的に意思形成していくこと」(上掲書、上8頁)です。

すなわち、環境危機の今日、これを克服するために我々はいかに自然とかかわるべきかについて、公共的意識を高めていくことが環境政策を推進していくために必要不可欠であることを、彼は機会あるごとに力説しています。実際、環境問題に関する公共的意識の高まりが現実の政治において環境政策の変更を可能にしたことを、彼は報告しています。哲学(研究)者が政治に関わるメリットとしてアービッヒが掲げるのは、哲学者が政党や団体などの圧力から自由であることです。しかも、環境大臣となると大きな行政権を手に入れることになりますから、自由裁量の幅が大きく広がるのです。これは彼が実際に環境大臣として仕事をした率直な感想ですが、日本において哲学者が政治に関わり環境政策に一定の影響を与えることなど夢のまた夢です。

ジープは私たちが最近訳出した『ジープ応用倫理学』(丸善)の序言で、その書のきっかけになったのは政府委員会の仕事であったことを語っています。ドイツの胚取り扱いに関しては、すでに1990年にできた「胚保護のための法律」(Gesetz zum Schutz von Embrzonen)がありましたが、ジープ達の委員会はこの法律を踏まえつつ、遺伝子操作技術が急速に発展した新たな時代に備えた新しい法律の成立に寄与しました。彼らの努力の末にやっと2002年に成立したのが、通称「幹細胞法」(Stammzellgesetz)です。この法の正式名称は「人間の胚性幹細胞の輸入と利用に関して胚保護を確保するための法律」(Gesetz zur Sicherstellung des Embryonenschutzes im Zusammenhang mit Einfuhr und Verwendung menschlicher embryonaler Stammzellen)です。この法律では「胚性幹細胞の輸入と利用」は原則的に禁止されています。しかし、この法律の目的は「人間の尊厳と生きる権利を尊重、保護し、かつ研究の自由を保障する」(Stammzellgesetz §1)というものです。したがって、胚性幹細胞の輸入と利用は禁止されていますが、研究の自由のために例外的にこの輸入と利用が認められることになります。後者の点に着目するなら、ジープに上の主著を書く重要なきっかけを与えた委員会は、胚性幹細胞の輸入と研究の承認へ道を開けた委員会であったと言ってもいいのではないでしょうか。

もう少しこの委員会の周辺事情について述べたいと思います。それは「幹細胞法」の運用についてです。つまり、研究の自由のために、特例的に胚性幹細胞を輸入したり利用したりしてよいという「お墨付き」を誰が与えるのかということです。この法律は申請主義をとっています。胚性幹細胞を輸入・利用したい人は、監督官庁であるロベルト・コッホ研究所にその旨を申請しなければなりません。その申請書を検討するのが、現在ジープが議長をしている委員会です。この委員会は「幹細胞法」に基づいて作られ、「幹細胞法」に基づいて審査する委員会です。この委員会の正式名称は「幹細胞研究のための中央倫理委員会」(Zentrale Ethik-Komission für Stammzellenforschung)と言います。この倫理委員会の審査結果が監督官庁に上がって、それに基づいて結論が出るわけですから、倫理委員会の責任はきわめて大きいと言わざるをえません。

私には、こうした委員会のあり方に、ドイツにおける哲学者の政治への関わり方の、もう一つの典型が示されているように思われます。この委員会の構成員のリストがここにあります。それによると、生物学、倫理学、医学、神学分野から二・三名の専門家が委員として選出されています。そして上述したように、ジープが委員会の議長を務めています。先に、哲学や倫理学の役割として、個別科学の成果の統合を掲げておきましたが、ジープはまさしく議長としてそのような役割を求められているのです。従って、今日ほど哲学に自然科学を含む諸科学に関する知見が求められる時代はないように思われます。ドイツにおいては、本来哲学がもっていた諸学の統合という役割が、それがたとえどんなに微弱な形ではあるとしても、政府委員会のなかで生きていると言えば言いすぎ

でしょうか。さらに、この表の神学のところをみますと、カトリックとプロテスタントから一名ずつ選ばれています。もちろん、ここにはヨーロッパ特有の文化的背景があるわけですが、このような公平な選択こそ責任ある倫理委員会を形成するための必要条件であると思います。このような構成員のリストに触れるとき、我々とは異なる知の伝統を感じざるをえません。知の伝統の異なる日本において、応用倫理学(哲学)がドイツのように政治過程に関わるということはきわめて難しいことでしょうが、これが少しでも実現されるなら「専門的な実務家」、「高度職業人」に対しても、その活躍の場が与えられることになるのではないでしょうか。

※この報告は、北海道大学大学院文学研究科思想文化学専攻の主催する「文部科学省、魅力ある大学院教育イニシアティブ」の「応用倫理研究教育プログラム」国際会議で、2007年2月9日に発表されたものを補正し加筆したものである。因みにこの国際会議シンポジウムでのテーマは「アジアとヨーロッパにおける応用倫理研究教育の展開」であった。

※※本報告は文部科学省科学研究費補助金［基盤C一般(課題番号17520016,研究課題:現代ドイツの実践的自然哲学研究—新たな応用倫理学の構築をめざして)］による研究成果である。

* アービッヒにとっては「自然との和解」が人間と自然とのあるべき姿であり、自然史の目的でもある。そこでは人間は自然の一部分として捉えられるが、自然史を完成する存在として特別な地位も与えられている。彼は哲学的にはスピノザやシェリングに近いが、カント哲学の独特な解釈によって、カントをも評価する。

Research and Education in Applied Ethics: Integrating Applied Ethics and Politics

Hirotaka Yamauchi

Professor and Director of the Research Centre for Applied Ethics Project
Graduate School of Letters, Hiroshima University
(Translated by Shunzo Majima, and confirmed by Hirotaka Yamauchi)

Introduction

First of all, I would like to thank people in the Graduate Programme in Applied Ethics (GPAE), who kindly give me an opportunity to present my paper on research and education in the field of applied ethics. I am familiar with research in applied ethics in the context of German practical natural philosophy, which was established by Hans Jonas, and then developed by Meyer-Abich and Ludwig Siep. In this context, it is quite clear to me what research in applied ethics means; however, it is another story how I have been involved in education in applied ethics. I have little thought about education in applied ethics in a reflective or systematic manner. The centre at which I am working as a director is not a centre for education in applied ethics, but a research centre for applied ethics. However, I hope this symposium would open the door for further understanding and discussion on research and education in applied ethics. In this presentation, first, I will report on the current activities of education in applied ethics at Hiroshima University; second, I will discuss research in applied ethics in the context of German practical natural philosophy. In this context, I will make one suggestion for research in applied ethics.

1. On Education in Applied Ethics

As I have said, I do not have any particular theory on education in applied ethics. Therefore, I would like to discuss this topic in a self-reflective manner. When I heard 'education in applied ethics', my first impression was such that education would be totally different depending on students whom we teach. I thought the type, style, focus, approach and contents of education would be totally different. We may ask ourselves such questions: Are we teaching the first-year undergraduates or final year's ones? Are we teaching undergraduates or graduate students? And, are we teaching at School of Letters or at Medical School? I was further sceptical about formalise applied ethics education as an education programme, because I think the programme-based education system is not suitable for applied ethics. In many academic subjects, it is not necessarily impossible to educate students on a step-by-step development basis, because requirements for education are quite clear at each level. However, it seems extremely difficult to apply this step-by-step development-based education system to applied ethics. This is because applied ethics is part of philosophy. This means that students

are required to be familiar with a philosophical way of thinking, in which reasoning and critical thinking are indispensable. (However, from the next academic year, we will introduce linear-style education programmes at Hiroshima University.)

Introduction of the linear-style education programmes is based on the premise that such an education model would maximise the effects and efficiency of education. Education in Japan is based on this premise. In particular, this education model is perfectly applicable to primary and secondary education for which uniformed textbooks are used. In this linear education model, a 'good' lecture is considered as a lecture that 'proceeds from concrete issues to abstract ones, from known to unknown, from feelings to intelligence, from small wholeness to large wholeness, from entity to language, and from specific to general' (Hisatake Kato, *Ethics of Education*, Maruzen, 2006, p. 98). This view on intelligence presupposes an idea of linear development of intelligence that 'human intelligence fundamentally develops from concrete thoughts to abstract ones and from feelings to intelligence'. This idea seems to coincide with Hegel's idea outlined in his *Phenomenology of Mind* that the most primitive feelings of 'Certainty at the level of sense-experience' would gradually be enhanced and develop into absolute knowledge. Indeed Hegel's *Bildung* might be interpreted in this way.

However, we have to be careful about this interpretation. Let us explore the following question: did Hegel think *Bildung* as a linear development of intelligence? In the introductory chapter of *Phenomenology of Mind*, Hegel explores the following question: how can we obtain such an experience? He also sketches an outline of the answer to the above-raised question. Philosophy is an incessant activity to ask questions to the ground and to consider the questions derived from the ground. This is the point which Heidegger argues in his *Hegel's Concept of Experience*. So, for Hegel, the development of consciousness is a return to the ground. In fact, it is not a linear development. However, I have to say that this view lacks in the linear model of education system. Therefore, it seems problematic that the linear model of education becomes widely accepted, not only in secondary education but also higher education, and not only in natural sciences but also in humanities. I think applied ethics is one of the fields of philosophy, and so it may be defined. This indicates that applied ethics is concerned not only with the questions concerning the application of theory but also with questions concerning the foundation of philosophy. We have to bear in mind this point when we consider and conduct education in applied ethics.

When I saw the webpage of the GPAE at Hokkaido University, I realised that this programme focuses on education for graduate students. In the mission statement, it says: 'This Programme is aimed at training research experts as well as professional practitioners in the field of applied ethics in collaboration with other Faculties and Schools of the University'. I assume that professional practitioners used in this context means what we call 'advanced professionals', who leave university with master's degree. We have to carefully consider whether or not the current education system can help master's degree holders become advance professionals. We also have to consider whether or not occupational fields that need these

advanced professionals exist in society. I have negative answers to these two questions.

I believe the most important thing in education in applied ethics is to train academic researchers. Again, in the webpage of the GPAE, it says: 'This Programme (1) aims at cultivating human resources who have interdisciplinary knowledge and research skills by liaising closely with other Departments and Schools, and (2) encourages students to acquire these academic assets through literature-based, theoretical research.' We know well that it is extremely difficult to simultaneously pursue these two different educational goals in parallel. Although I have been teaching at Hiroshima University for more than a decade, I have never taught graduate students applied ethics. In the seminars which I lead, we read the German original text written by Kant, Fichte, Schelling and Hegel (although we did not read through all of these works from the beginning to the end).

I understand that it is fundamental for scholars to read and understand the original text, and this is not easy. In addition to this, it seems extremely difficult for young scholars to conduct research on applied ethics. One of my predecessors of the Research Group is Professor Chukei Kumamoto, who is an expert on Fichte, another is Professor Yukio Miwatari, who is an expert on Kant. Their successor, Professor Hisao Takayanagi did not change this tradition. We cannot easily change the orthodox research style in the traditional Research Group, and I am convinced that we should not change it.

Having said that, however, I am not saying that we do not need education in applied ethics. In one term a year, I lead a class of applied ethics for undergraduates, focusing on environmental ethics, at which graduate students are also required to attend. In addition to this, I frequently refer to applied ethics in the class of history of philosophy. Furthermore, graduate students are required to attend the seminar at the Research Centre for Applied Ethics Project. Our plan is, first, to make graduate students familiar with applied ethics and basic knowledge on applied ethics through these educational opportunities on applied ethics. Then, second, after students get PhD in the orthodox research style, we encourage these PhD degree holders to focus on applied ethics. One of my students, who received a PhD on Fichte, wrote a paper on information ethics. Frankly speaking, the quality of the paper is not excellent; but I am confident that his academic career embodies my ideal on research in applied ethics. First, foundational research on literature-based and theoretical research for PhD, and then applied ethics.

This style of education and research in applied ethics seems to indicate that research in applied ethics depends on the characteristics and dispositions of individual scholars. It also indicates that experts on applied ethics are not properly trained. My colleagues, Professors Mitsugu Ochi and Fumio Matsui take a different approach from mine. They more focus on education in applied ethics at the undergraduate level. In such an educational environment, experts on applied ethics have been more properly trained. This is the current situation of education in applied ethics at our University.

I have not discussed whether or not education in applied ethics is necessary, because it is so

obvious that education in applied ethics is necessary in the field of philosophy and ethics. Applied ethics is a philosophical and ethical approach to contemporary issues.

2. On Research in Applied Ethics

On the early days when applied ethics was introduced in Japan, applied ethics was considered not only as a discipline in which certain theory and principles are applied to the practical issues, but also as a discipline in which we can deal with new, serious problems, which could not be solved by conventional philosophy and ethics. (This understanding of applied ethics aligns with the purpose of our centre, which you can find in our Journal 'Praxis'.) In the Japanese context, the former meaning of applied ethics has been less emphasised and the latter has been widely publicised. However, in Germany, generally speaking, applied ethics is understood as a discipline in which certain principle, for example, Kant's principle on morality or a pleasure-pain utilitarian principle, is applied to the practical issues. Practical natural philosophers like Siep find their own position in the field of applied ethics, broadly speaking, but they also differentiate their position from top-down style applied ethics. Practical natural philosophy is concerned not only about the application of principles but also about the efficacy of principles and establishment of new principles. In the previous part of this paper, I have defined that applied ethics is one of the fields of philosophy. In this vein, I think practical natural philosophy is a modern philosophy that involves applied ethics because practical natural philosophers deal with contemporary issues with the above-described attitude. However, I shall stop this discussion as I am still studying this topic. Let us move to the suggestion, which is the main topic in today's presentation.

Today, I would like to suggest integrating applied ethics into politics and political philosophy. Because applied ethics is closely concerned with practical issues and able to suggest solutions to these issues and problems. Applied ethics is not an academic field pursued by research only. I argue that applied ethics must be integrated into politics, that its research results must be inputted into the political process, and that the ideas and ideals contemplated in applied ethics must be realised through political means. Practical natural philosophers in Germany envisage the linkage between applied ethics and politics.

I completed the translation of Meyer-Abich's *A way to Reconcile with Nature* last year, and I would like to mention that its subtitle is 'practical natural philosophy for environmental policy'. At the introductory remarks, he argues: 'The purpose of this book is to holistically envisage and reasonably consolidate politics that reconcile with nature'. In order to realise this vision, it is necessary to revive the close relationship between politics and philosophy since Plato. In Abich's interpretation, through all his works, Plato aimed to regain a 'spiritual pillar' to Athens, which was spiritually devastated by Sophists and militarily defeated in Peloponnesian War. It is a pity that Plato became a recluse in the wood of Academos after the death of Socrates. However, I believe, we should not keep indifferent to politics, but we must get involved in politics for reconciling with nature.

As is known, truth is the most important issue in philosophy and ethics. Abich proposes truth as a vehicle to reconcile with nature. Therefore, living in such a way to follow this idea as a norm means to living good. Moreover, when philosophy is involved in politics, other people are also required to live in such a way. As history shows, philosophers' involvement in politics was always disastrous. We can find one of the recent examples of failure in the Stalinist States. However, according to Abich, philosophy has to get involved in politics, or politics has to get involved in philosophy. In this context, he proposes the role of philosophy as a device for coordination. By a device for coordination I mean a mechanism to integrate the outcomes in the field of each and every science into politics for reconciling with nature. I will shortly come back to explain what this means.

In order to reconcile with nature, it is necessary for us to change our lifestyle. Specifically, according to Abich, reconciliation with nature requires us to change such an idea and ideal in modern lifestyle that 'a quality of life is characterised by the fact that we eat half a pound of meat and consume a huge amount of electricity everyday and that work is considered valuable solely as a means to achieve these indulging sprees'. This demand brought by reconciliation is denial of modern political philosophy of Machiavelli and Hobbes, because the starting point of modern political philosophy is denial of Platonic political philosophy in which the purpose of politics is to achieve justice. This is the turning point that the purpose of politics shifted from achieving justice to satisfying the desire of people. Alexandre Kojève called the nation that has succeeded in equally satisfying the desire of people the 'universally homogenous nation'. Francis Fukuyama declared that the ideal of modern political philosophy, that is the universally homogenous nations, was realised in the Western developed industrial countries in the twentieth century. However, the result is the environmental destruction at the global level. We therefore may argue that the ideal of modern political philosophy is no longer tenable. For Abich, by giving up an idea to control nature, the ideal of political philosophy should have been envisaged in an alternative framework based on the norm of reconciliation with nature.

We can find that Abich's vision on reconciliation with nature underlay the political manifest of the Social Democratic Party for the 1982-3 general election in the former West Germany. That political manifest was adopted in a unanimous at the party congress in Dortmund in January 1983. One year after, as a minister of environment of the Hamburg City, Abich lead City's environmental policy. His political goal as a minister of environment was 'to construct the public sphere concerning nature and environment by means of politics through democratic deliberation'. As a promising way to overcome the current environmental crisis, Abich repeatedly stresses that it is indispensable to enhance our public spirit in order to implement the environmental policy that defines the future relationship between human beings and nature. Indeed he reported that the enhanced public spirit enabled us to change the environmental policy. Abich points out that the merit of the involvement of a philosopher in politics was in that he was free from political pressure made by political parties and other groups. As an environment minister, Abich could exercise extensive executive powers at his own discretion.

Although this is his frank comments on his experience as an environment minister, it is unimaginable in the context of Japan that a philosopher gets involved in politics and uses his influence on the environmental policy.

In the introductory note of his new book (*Konkrete Ethik*), Siep wrote that his experience as a member of the government-sponsored committee triggered his interest in writing the book. There was an existing law on the protection of embryo called, *Gesetz zum Schutz von Embryonen*, enacted in 1990. However, Siep and his committee members contributed to make a new law that meets the emerging issues in the era of the rapid development of genetic engineering. As a result of their effort, so-called *Stammzellgesetz* was enacted in 2002. This law is called *Gesetz zur Sicherstellung des Embryonenschutzes im Zusammenhang mit Einfuhr und Verwendung menschlicher embryonaler Stammzellen*. This law, in principle, bans import and use of human embryonic stem cell. However, the purpose of this law is 'to respect and protect human dignity and rights to life, and to ensure the freedom of research' (*Stammzellgesetz*, Section 1). This clause indicates that the import and use of human embryonic stem cell are exceptionally permitted only for research purposes. If we positively assess the latter point, then we may consider that Siep's activities at the committee have opened the way for approving of the import of embryonic stem cell and its research.

Let me just give you some more details surrounding this committee on the operation of *Stammzellgesetz*. The issue of operation raises the following question: who authorises the import and use of embryonic stem cell for research purposes as an exceptional case? This law assumes an application-based system for the import and use of embryonic stem cell. Researchers have to submit an application to the Robert Koch Institute that has power for authorisation. The application is then considered at the committee at which Siep chairs. This committee is called *Zentrale Ethik-Komission für Stammzellenforschung*. The final decision of approval/disapproval of the application is made by the Robert Koch Institute, but its decision is based on the result of deliberation at Siep's ethics committee. This decision-making system indicates that the responsibility of the ethics committee members is grave.

We can find a typical way of philosopher's involvement in politics in the structure of Siep's committee. As the list of the members of the committee shows, members are selected from the fields of biology, ethics, medicine and theology (each two or three experts are delegated from all fields), and Siep is the chair of the committee. As I mentioned that the role of the philosophy and ethics is to integrate the outcome of the different fields of science, Siep is expected to play such a role as a chair of the committee. This example indicates that it has never been more important than ever in today's world that philosophy needs knowledge on sciences (including natural sciences). I argue that the traditional role of philosophy to integrate all sciences is practised (however weakly it is) in the government-sponsored committee in Germany. It is quite interesting to see that two theologians (one Catholic and the other Protestant) are elected as members of the committee from the field of theology. We may see that the reason of election is concerned with cultural backgrounds peculiar to Europe: however,

I think this fair selection of members is a necessary condition to form an ethics committee that is expected to work in a responsible manner. I noticed that the intellectual tradition in Germany is quite different from ours when I saw the list of the committee members. It seems very difficult that applied ethics (philosophy) is involved in politics in Japan, unlike in Germany; however, professional practitioners and advanced professionals might have a chance to find their role as coordinators to integrating the outcome of sciences if philosophy found its role in politics.